

ジャガイモと映画 (21)

<ジャガイモ大好き (2)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

78. 『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』

2019年、イギリス・ウクライナ・ポーランド映画。監督：アグニエシュカ・ホランド。

旧ソ連時代のスターリンとその政権のことが映画で観られると期待したが、スターリンは一度も出てこなかった。

ウクライナは2022年2月ウラジーミル・プーチンによる侵攻を受けた。かつてウクライナは1932、33年の大飢饉の際、ソ連の穀物徴発を受け、餓死者数百万人を出したとも言われる苦痛も受けた国であった。

1933年、世界は深刻な経済恐慌に陥っていた。それなのに、スターリンが統治するソビエト連邦だけが何故好景気で繁栄しているのか。ヒトラーに取材した経験を持つ若き英国人記者ガレス・ジョーンズ(ジェームズ・ノートン)はその謎を解くためにモスクワを訪れる。しかし、当局からホテル

を指定され、自由な行動は許されない。ニューヨーク・タイムズの女性記者であるエイダから「ウクライナに答えがある」と告げられ、監視する当局の目をかいくぐり、汽車に乗り込む(写真1)。

着いたウクライナでは、死体で山積みの荷車に母親の死体を無造作に積んで、まだ泣いている幼児もその死体の上に放り投げたり、食料を盗む子供や飢えと寒さを嘆く歌を口にする子供がいた。立ち寄った家で肉を出され、子供に何の肉か訊ねると「兄さん」と答が帰ってきたこともある。そのような想像を絶する悪夢のような世に言う“ホロドモール”を撮影する。当局から消されずにイギリスに戻ることはできたが、エピローグの字幕でジョーンズは30歳前の彼が中国の取材中に誘拐され亡くなったことが示され、それがソ連によるものであることが示唆される。

スターリンの恐怖政治によって粛正・弾圧された犠牲者は、1938～39年の大粛正期だけで知識人、科学者、政治活動家を中心に170万人が処刑または投獄され、その頃の彼の執務は死刑執行命令書に署名することで費やされたと言われている。

映画にスターリンは出てこないが、彼とジャガイモについても取り上げたい。すなわち、彼は美食家であり、よく食べ、ウオッ



写真1 ホロドモールを撮影に行く

カとジャガイモが好きな人であった。『スターリン～その秘められた生涯～』＜バーナード・ハットン著・木村浩訳、1989年、講談社学術文庫＞などによると、朝から酒を飲み、主菜として、串焼き羊肉（シャシリーク）に蒸したジャガイモを添えるか、大きなステーキに蒸し焼きのタマネギを添えたものを食べ…。ある時は、焼タマネギとゆでたジャガイモを添えた豚肉料理、またある時は、焼きジャガイモ添えのウィーンナシュニツツェルであり、ピラフ（肉飯）、家鴨の焼肉も好きだったという。

79. 『炎の人 ゴッホ』

（原題：Lust for Life）

1956年、アメリカ映画。監督：ビンセント・ミネリ。

ジャガイモのある絵を残した画家はそれなりにいるが、単年度にたくさん書いた画家と言えばゴッホであろう。例えば1885年オランダで、「ジャガイモの皮をむく農婦」2枚、「ジャガイモを食べる人々」の習作及びそのもの2枚、「ジャガイモを掘る2人の農婦」、「ジャガイモのかご」3枚、「ジャガイモのかごのある静物、周囲に紅葉と野菜」などを描いている。

この映画は、1934年のアーヴィング・ストーンの小説『炎の人ゴッホ』（新庄哲夫訳、1990年、中央公論社、以下原著と言う）を元に作られている。

ブラッセルの学校を出たフィンセント・ファン・ゴッホ（カーク・ダグラス）は、炭鉱町で司祭から、悲惨で貧しい労働者の生活に自ら進んで入り、体を壊し、原著ではジャガイモを茹でて食べている。彼の弟テオ（ジェームズ・ドナルド）は画商とし

て成功しており、彼を暖かく故郷へ連れてくる。ゴッホは、袋にジャガイモを詰める農夫の習作を描くなど、苦勞している人に魅力を感じていた。ハーグに移り住んで、子持ちの売春婦クリスティーナ（パメラ・ブラウン）が訪ねてきたときの食事はジャガイモとお茶のみであった。このように、ゴッホはジャガイモが好きであり、原著ではジャガイモにコーヒーはその後複数回見られる。

1883年12月から1885年11月まで2年間ヌエネンで過ごすが、ジャガイモを常食としているデ・フロートという質素な農夫の一家と親しくなり（原著）、映画では妻から種いもの支払いをどうするのが話題にあがっていた。そこで『ジャガイモを食べる人々』（写真）が描かれ、頭書に書いた多数の作品を残すことができ、ヌエネンには今日ゴッホ像が建てられている。



写真2 「ジャガイモを食べる人々」

故郷で努力した後、パリで店を任されているテオをたずねて行く。そこでは、スーラ、ロートレック、ルノアール、ポール・ゴーガン（アンソニー・クイン）らが、自らの個性を伸ばそうと競っていた。置かれたものを描くよりも動きのあるものが好きな

ゴッボだったが、彼らによりさらに力をつけ、陽の光を求めてアルルへ移り、炎のような真夏の野原を、夢中になって描いた。

目指す画風の異なるゴーガンとの共同生活に失敗し、自分の手で耳を切り取る事件を起こし、サン・レミイの精神病院の後パリに近いオーヴェールの病院に移ることができるのだが、麦畑の中で群れをなす鳥の不気味な姿を描きながら、自らの脇腹をピストルで射つことになる。行年37歳。映画の原題の意味は、「生への渴望」。

80. 『夜霧よ今夜もありがとう』

(英題：A Warm Misty Night)

1967年、邦画。監督：江崎実生。

外国航路の貨物船の船長・相良徹（石原裕次郎）は帰国後、恋人のバレエダンサー北沢秋子（浅丘ルリ子）に求婚し、二人は将来を誓い合う。しかし約束の教会に向かう途中、秋子が謎の失踪を遂げてしまう。夕暮れの協会で相良は秋子をいつまでも待ち続けた後、失意のうちに船を降りる。4年の歳月が流れ、横浜において表ではナイトクラブ『スカーレット』を経営し、裏では危険な国外逃亡を請け負う「逃がし屋」をやり、本当に困っている人だけに抜け道を与えている。

そんなある日突然、秋子が姿を現わす。グエン（二谷英明）の妻に収まっているが彼女への想いが再び募っていく…。

この映画にジャガイモは出てこないが、石原は幼少時小樽市で育ったためか、ジャガイモ、とりわけ、暑い日などに欲しくなる冷製スープ・ヴィシソワーズ（写真：札幌市中の島“穀物祭”提供）が大好きな人と判ったため、取り上げることにした。



写真3 ヴィシソワーズ

石原裕次郎、渡哲也らの石原軍団の男の炊き出し料理が2011年『石原軍団炊き出しレシピ33』として青志社から出されている。ホワイトシチュー、皆の好きなポテトサラダなど計33。ヴィシソワーズは食卓にもう一品欲しいときに人気があり、仕上がりの滑らかさに関わるため、ジャガイモが充分柔らかくなるまで煮てつくる。冷蔵庫で冷やし、食べる時パセリを散らして食べる。石原裕次郎が暑くて食欲がない夏に好んで食べていたものである。